

解答と採点基準

問1 茶室という空間には客を迎えるメインの座敷の他に、主人が使う水屋がほぼ同じ大きさで用意されており、客と主人のそれぞれが、別々の入り口から別々の経路をたどり対面するという点。

- A・B・Dがなければ全体0。
A=2 「客」「座敷」という要素は必須。
B=2 「主人」「水屋」という要素は必須。
C=3 「座敷と水屋が」「ほぼ同じ大きさ」という内容は必須。
D=3 「客と主人が別々の経路をたどる」という内容は必須。

問2 西欧にみられるように、主人の大きく開放的な空間が建築の中心を占め、使用人の小さく閉鎖的な空間がそれを取り囲むという階層的な構造。

- B・Cがなければ全体0。
A=2 「西欧における」「西欧建築の」といった表現でも可。
B=3 「主人の空間」という内容は必須。「大きい」「開放的」「建築の中心」という要素がなければ、それぞれ減点1。
C=3 「使用人の空間」という内容は必須。「小さい」「閉鎖的」「主人の空間を取り囲む」「周縁に存在する」でも可」という要素がなければ、それぞれ減点1。
D=2 「階層的」という要素は必須。

問3 ミースの提唱した近代建築は、西洋の伝統的ヒエラルキーを排した境界のない均質な連続的空間を追求したものであったが、それは、水平に広がる大空間を必要に応じて間仕切る合理的で効率的な空間を、積層して発展しようとするアメリカ流工業化社会が求めていたものであったといふこと。

- B・C・Eがなければ全体0。
A=2 「ヒエラルキーを排除した」という内容は必須。
B=2 「均質な」「連続的」「境界のない」でも可」という要素がなければそれぞれ減点1。
C=2 「水平に広がる大空間を必要に応じて間仕切る」という内容は必須。「合理的」あるいは「効率的」といった要素がなければ減点1。
D=2 「積層していく」という内容は必須。
E=2 「求めていたものであった」は、「合致した」「適合した」などの表現でも可。

問4 二〇世紀アメリカの均質な空間や、西洋の伝統的な序列ある空間に対して、筆者は違和感を抱いていた。そこで、水屋と座敷とがからみあう日本の茶室に注目し、主人と客の二つの空間を持つ、「一体化しながら別物であり、対等でありながら異質であり、時間によって互いの役割が転換する」という回転の原理を導入し、時間を通じて、世界とつながろうと考えている。

- A=2 (従来の建築に対して)「違和感を抱いていた」という内容は必須。「均質な空間」「序列ある伝統的空間」という要素がなければそれぞれ減点1。
B=2 「水屋と座敷」「主人と客」という要素がなければそれぞれ減点1。
C=3 「回転の原理を導入する」という内容は必須。「一体化しながら別物」「対等でありながら異質」「互いの役割が転換する」という要素がなければ、それぞれ減点1。
D=3 「世界とつながる」という内容は必須。「時間を通じて」という内容がなければ減点1。

テーマ解説

日本の茶室空間が持つ特異な構造

しばしば日本の建築は、西欧のそれと比較されながら論じられる。自然観、宗教観、文化的背景の違いなどが指摘され、一般的な議論が導かれることも多いなかで、本文では空間的構造そのもの、それも日本の茶室が持つ、主人と客という二重性を有する空間に焦点を当てた議論が、西欧との比較のなかでなされている。伝統的な日本の茶室空間に特異性を見だし、その構造原理をつきつめることで建築の新たな可能性を追求する筆者の、意欲的かつ独創的な姿勢がうかがえる。

考察

問1(具体的説明)

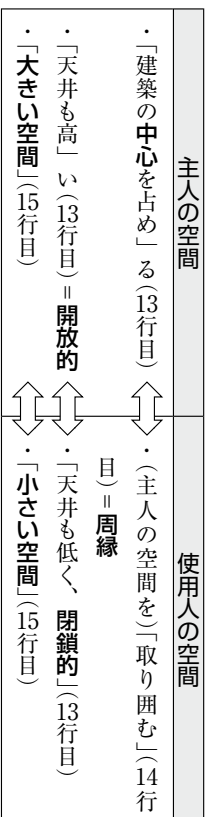
「この二重性」とあるので、この指示語を追って直前を見る。すると、「二つの主体が、別々のところから別々の経路をたどり、最終的には一点で交差する」とあり、二重性について説明した箇所となっている。「二つの主体」が主人と客を指すことは明らかであり、この両者が二重性のそれぞれ中心にあることが理解できる。

さらに、傍線部の後の段落では、「水屋と座敷という二重性」という表現が出てくる。これについては、4〜5行目で「客が茶を喫するメインの座敷に附属して、水屋と呼ばれるサービス空間が、ほぼ同じ大きさで用意されている」と詳しく説明がされており、主人が使用する水屋と客が茶を喫する座敷が対等に存在するという対比構造がみとれる。これらの「二重性」について整理すると、次のようになる。対比を意識しながら解答をまとめる。

Table with 2 columns: 主人, 客. Rows describe the layout of the water room and the main sitting area.

問2(指示内容の説明)

「その序列」の指示内容を明らかにすることが求められており、直前の段落に注目する。この直前の段落では、西欧の建築を支えた序列(「ヒエラルキー」)について具体的に述べられているが、指示内容を最も端的に表しているのは12行目「主人の空間と使用人の空間」というヒエラルキーである。したがって解答では、「主人の空間」と「使用人の空間」の両空間の対比を意識しながら、西欧建築におけるヒエラルキーについて説明すればよい。



階層的な構造

問3(箇所の説明)

傍線部を本文に沿って詳しく説明することで、言い換えていく。

- ① ミースの唱えたユニバーサル・スペースは、二〇世紀のアメリカ流工業社会に、ぴったりとフィットした。
② 「二〇世紀のアメリカ流工業社会」が求めた空間・建築については、傍線部の直後に具体的な説明がある。すなわち、「水平に広がる大空間(41行目)」を「必要に応じて間仕切る(42行目)」という「合理的効率空間(42行目)」が求められ

①「ミースの唱えたユニバーサル・スペース」については、29行目から始まる段落で詳しく述べられている。ミースが主導した近代建築運動では、「空間のヒエラルキーの排除(30行目)がめざされ、「均質空間(29行目)や、「壁」という境界のない、透明で連続な一室空間が追求された(31〜32行目)とあるので、これらをまとめればよい。

②「二〇世紀のアメリカ流工業社会」が求めた空間・建築については、傍線部の直後に具体的な説明がある。すなわち、「水平に広がる大空間(41行目)」を「必要に応じて間仕切る(42行目)」という「合理的効率空間(42行目)」が求められ

たのであり、こうした空間を「積層させていくことで、高密度の効率的都市を作る」(42〜43行目)というのが、二〇世紀アメリカのめざした「大きな建築」だったのである。

以上のポイントを踏まえ、ミースのめざした空間が、二〇世紀のアメリカ流工業社会が求めたものに「ぴったりとフィットした」、すなわち、まさしく合致したことを説明すればよい。

本文中の言葉を上手に用いて組み立てることで、解答可能な設問である。

◎問4 (内容把握)

問われているのは、「筆者がピーナッツ型の茶室を建てた背後にある考え」だが、「この文章での検討の過程を踏まえて」という設問の条件にも留意する。

本文における話題の展開を簡単に整理すると、以下のようになる。

- ①日本の茶室空間の特異性(筆者の主張)
- ← ②近代建築がめざした均質な空間(一般論)
- ← ③ポストモダニズムがめざす西洋の古典的空間への回帰(一般論)
- ← ④日本の茶室空間の構造原理を応用したピーナッツ型の茶室(筆者の主張)

一般論の提示から、筆者の視点に切り替わって④の話題になるのは57行目であり、これ以降の内容を中心に解答を作成すればよい。ただし、「検討の過程を踏まえて」とあるので、②や③についても軽く触れる必要がある。

「人間は梁の下には眠れない存在かもしれない。均質な空間の中には生きられない存在かもしれない」(54行目)＝二〇世紀アメリカのめざした均質な空間への違和感

「再びギリシャ・ローマ流の古典に戻っていく必要もない。主従という序列に

戻る必要はない」(55行目)＝序列のある西洋の伝統的な空間への違和感

← 「座敷と水屋とがからみあう回転型の構造」が、突如として面白く見えはじめた(57行目)＝

・「人はときに主人を演じ、あるときは客を演じる」(61行目)＝主人と客のお互いの役割が転換するという構造

・「主人と客の二つの空間」が「一体化しながら別物であり、対等でありながら異質である」(62〜63行目)という構造

← 回転型の構造(回転の原理)の導入

← 「時間を通じて、自分と世界をつなごう」(65〜66行目)と考えた

← ピーナッツ型の茶室(「小さな建築」)の完成

要旨

日本の茶室空間には、主人の使用する水屋と、客が茶を喫する座敷が対等に存在し、主人と客が別々の経路をたどって対面するという二重性が見いだせる。近代建築がめざした均質な空間や、西洋の伝統的な序列ある空間とも異なる日本の茶室は、主人と客の空間が回転し続ける構造を持っており、この回転の原理を導入した建築では、時間を媒介することで自分と世界をつなげる試みが可能となる。(181字)

筆者

隈研吾(くま けんご) 一九五四年〜。神奈川県生まれ。建築家。東京大学教授。国立競技場をはじめ、国内外の数多くの建築のデザインに携わっている。『新・建築入門——思想と歴史』『負ける建築』など、著書多数。二〇一九年紫綬褒章受章。

出典

『小さな建築』

(岩波新書 二〇一三年)